

1 1	海部	あま市立七宝北中学校	タケウチ ノリコ
			名前 竹 内 紀 子

分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生徒指導（中学校）
-------	-----	------	------------------

研究題目 主体的に学ぶ「自立した学習者」を育む学習環境と授業の工夫
—共生的な学びが育む自己有用感と基礎学力の向上をめざして—

研究要項

1 研究のねらい

本校では、めざす生徒像を「人としての基を築き、自らを高める生徒—人間性・社会性の豊かさをめざして—<人に信頼され、人に必要とされる人間に>」と定め、「心身ともに強くたくましく、最後までやり遂げる生徒」「深く考え、連帯意識をもち、正しく行動できる生徒」「心優しく節度ある、心情豊かな生徒」「自ら学び、新しく、共に考え、学校文化を創り上げる生徒」の育成を柱に、特色ある学校づくりを推進している。昨年度の実践では、ペア学習やグループ学習を継続的に取り入れることで、自らの考えを表現し他者の考えを尊重する生徒の育成につながった。一方、人権教育の充実に向けては、実生活と関連付けた体験的活動を継続して実施する必要があるという課題が残された。

そこで本研究では、不登校対策として「新たな一人を出さない」ことを念頭に、一人一人の思いや背景を理解し、互いを認め合う学級・学校づくりを進めるとともに、人権教育の視点を生徒指導の基盤に位置付ける。その上で、ICT環境やペア・グループ学習を活用した主体的・協働的な授業、多様な他者との出会いや振り返りを重視した体験活動、人権課題を自分事として捉え、企画・発信するYDKプロジェクトを関連付けて実践する。

これらを通して、他者とともに学びながら自ら考え、選択し、行動する「自立した学習者」を育成するとともに、共生的な学びを通じた自己有用感の醸成と基礎学力の定着・向上をめざす。

2 めざす生徒像

- ・ ICT環境や対話を活用し、基礎的な知識・技能を身に付け、他者の考えを取り入れて自らの学びを調整しながら、探究的に学び続けることができる生徒
- ・ 互いの個性を尊重し、認め合い、高め合うことができる生徒
- ・ 人権課題を自分の生活と結び付けて考え、よりよい行動を主体的に選択できる生徒

3 研究の仮説

- (1) ICT環境や対話活動を目的に応じて活用し、考えを共有する場を設けることで、他者の考えを取り入れながら学びを調整し、基礎学力を高め探究的に学ぶことができるだろう。
- (2) 体験活動で多様な考えや生き方に触れ、目標設定や振り返りを共有することで、自己を見つめ直し、互いのよさや違いを認め合うことができるだろう。
- (3) 人権教育やYDKプロジェクトで調査・対話・実践・発信する機会を設けることで、人権問題を自分事として捉え、よりよい学校や社会づくりに主体的に関わることができるだろう。

4 研究の組織

校内研究推進委員会		
【校長・教頭・教務・校務・教研学校代表者・学年主任】		
授業研究部会		学習環境研究部会
学校訪問の指定授業を中心に教育諸課題に対し、授業づくりから考える部会		生徒指導・地域連携・小中高連携・人権教育・道徳教育及び校内環境整備から、重点努力目標の達成をめざす部会

5 研究の方法

(1) 対象学年 全学年

(2) 手立て

① ICT環境と対話を生かした主体的・協働的な授業づくり【仮説(1)】

各教科の学習場面において、学習目的に応じてICT環境やペア・グループ学習を取り入れる。自分の考えを表現し、他者の考えと比較して再構成する活動や学習内容を繰り返し活用する活動を通して、生徒が基礎的な知識・技能を身に付け、自らの学びを振り返り、次の学習に生かすことができるようにする。

② 多様な他者との出会いと振り返りを生かす体験活動の充実【仮説(2)】

ア 修学旅行や職場体験学習、福祉実践教室などを通して、さまざまな人々と出会い、その考え方や生き方に触れることで、自分自身を見つめ直し、多様な価値観や互いのよさを認めることができるようにする。

イ 各体験活動において、体験前に自分なりの目標をもち、体験後に感じたことや気付いたことを振り返る場を設ける。必要に応じてICT環境を活用し、振り返りを互いに伝え合うことで、体験の意味を深め、今後の生活に生かす行動を考えることができるようにする。

③ 『YDK（やれば・できる・北中生）プロジェクト』一広がり 幸せの輪—の取組【仮説(3)】

各委員会が、人権や異文化理解など自他を大切にする課題を見いだし、話し合いを通して企画を立案し、実践・発信・振り返りまで行う場を設けることで、人権問題を自分事として捉え、自分たちの考えを基によりよい行動を自己決定できる力を身に付けられるようにする。

(3) 人権教育に関わる行事等の年間計画

4月	人権教育の全体計画の立案	10月	学校祭、道徳科研究授業
5月	校内美化活動、野外教室、YDKプロジェクト4(立案)	11月	人権に関する講演会
6月	修学旅行、福祉実践教室、職場体験学習、YDKプロジェクト4(準備・実践)	12月	人権週間、人権標語作成、人権アンケートの実施
7月	YDKプロジェクト4(実践・振り返り)	2月	3年生を送る会
9月	前期の振り返り	3月	1年間の振り返り

(4) 検証

検証に当たっては、仮説(1)については各教科の目標達成状況、振り返り記述、ICT環境や対話による意見交流の記録を、仮説(2)については体験前後の記述や事後レポートを、仮説(3)については企画内容、制作物、発表、事後アンケートを用いる。これらをもとに、三つのめざす生徒像に対応した生徒の意識・記述・行動の変容を分析する。

【アンケート項目の例】

- ・他者の考えを取り入れ、自分の考えや表現をよりよくすることができたか。
- ・学習した知識・技能を繰り返し活用し、次の課題に生かすことができたか。
- ・体験を通して、自分と異なる考え方や立場を尊重し、自分の在り方を見つめ直すことができたか。
- ・人権課題を自分の生活と結び付け、よりよい学校や社会のために行動しようと考えたか。

6 活動の実際

(1) 授業実践【仮説(1)】 生徒指導の実践上の視点 (1) (2)

① 3年生 英語科の実践

ア 本時のねらい

本単元では、「人や環境にやさしいファッションの取組について説明することができる」というゴールに向けて、エシカルファッションを題材として学習する。本時は、現在完了進行形の文の形・意味・用法を理解し、ペアで英文を確かめながら繰り返し活用することで、基礎的な文法事項の定着と主体的な表現をめざす。

イ 授業の様子

現在完了進行形の文法導入後、主語・動詞・期間などの条件を変えたパターン練習を行った。ペアでの口頭練習では、協働的に英文を確認しながら発話する姿が見られた。また、定着を目的として取り組んだバトルシップゲームでは、ねらいである現在完了進行形の文型を意識しながら活動する生徒の姿があった。活動中には、問いかけに詰まる相手を急かさず待つ温かい雰

困気や間違いを恐れずに英語で表現し続けようとする安心感のある空間が共有されていた【資料1】。

ウ 考察

本時では、現在完了進行形の理解後、練習やゲームなどの対話的・反復的活動で活用を促した。英語が得意でない生徒も、相手と英文を確かめながら発話を重ね、次第に自信をもって表現する姿が見られた。

このことから、対話を取り入れた反復的な活動は、基礎的な文法事項の定着と主体的な参加に有効であった。のちの「エシカルな商品をPRしよう」の授業へ向かう主体的動機づけ（自信）となることが期待される。一方で、KPT法（Keep・Problem・Try）を活用して自らの学びを構造化し、調整するような振り返りの工夫が課題であった。



【資料1 ペアでの活動】

② 2年生 音楽科の実践

ア 本時のねらい

「地球の鼓動」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容及び曲の背景との関わりに関心を持ち、全体の響きを聴きながら他者と合わせて歌う技能を身に付ける。音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習に取り組む。

イ 授業の様子

範唱を聴きながら曲の構成を捉え、各声部の関わり方について確認した。次に旋律の重なりに着目しながらパート練習をした。各パートで歌い方を試行錯誤しながら音楽表現の工夫を重ねた。全体で歌った後、各パートリーダーを中心にユニゾン・掛け合い・ハーモニーの重なり方を比較しながら声部の役割を生かした歌い方について話し合いをした。その後、各パートでまとめた意見を全体で交流し次の合唱につなげた。自分とは異なる歌い方を選択する生徒の意見を聞くことで、表現方法の多様性に気づき認め合うことができた。

ウ 考察

パート練習では、曲の構成を捉え、各声部の関わり方を確認しながら範唱とともに繰り返し歌った。AからFにかけて曲が転調するところでは曲調の変化を理解しながら歌うことができた。また何回も繰り返し練習したり時間をかけて練習したい箇所を意見交流したりすることができた。そのことで、他者（他のパート）の存在を認め、旋律の重なり方に意識を向けた響きのあるハーモニーを主体的・協働的につくり上げようと活動する生徒の姿がよく見られた。さらに、ロイロノートの提出箱に振り返りを提出させ、モニターに映して学級全体で共有した【資料2】。その結果、他者の感想や助言を次の合唱に生かす姿が見られ、ICT環境を介した即時共有が自らの学びの調整と音楽表現の改善に結び付いた。

単純に音が取れていない。
1人の声が小さくなると、みんなの声も小さくなっていくので、しっかり自分の意思を持って周りが歌えなくても自分が引っ張る勢いで全員が歌えるようにした方がいい。
細かい音程が、取れていないところが多いので、音源に合わせて練習するのもいいけれど、アカペラで歌った方が音程の修正がしやすいと思うのでパート練習で取り入れていきたい。

【資料2 モニターの意見】

③ 1年生 保健体育科の実践

ア 本時のねらい

個人の目標を立てた上でチームの課題を共有し、現状に合った作戦を立てて試合に臨む。また、チームでの練習を通して、自分やチームメートの課題を客観的に捉え、その課題に主体的に向き合い改善する力を身に付ける。

イ 活動の様子

個人でドリブルやシュート、ペアでパスの基礎練習をした。試合でシュートやパスができるようにこれまでの学習で個人の目標を明確にした上で、チームとしての目標を立てることができた【資料3】。



【資料3 個人目標の意見交流】

ウ 考察

個人の目標を考える際、すぐに目標を設定できない生徒も意見交流によって多様な考えに触れ、そこから自分に合う目標を選ぶことができた。また、チームの目標設定では、バスケットボールを得意とする生徒がリーダーシップを発揮し、目標達成に向けて主体的に取り組む姿が見られた。一方で話し合いが特定の生徒に偏らないよう役割分担を工夫することはできたものの、全員の考えを十分に反映させるまでには至らなかった。今後は、スプレッドシートを活用して全員の考えを可視化し、一人一人の自己決定を支える話し合いの在り方を工夫していくことが課題である。

(2) 体験活動の実践【仮説(2)】 生徒指導の実践上の視点 (1) (2)

① 職場体験学習 (2 年生)

ア ねらい

実際に働く人と接し、仕事を体験することで、働くことの意義や責任、社会を支える多様な役割について考えさせる。また、社会人として大切なモラルやマナーを身に付け、地域や事業所への理解と愛着を深めさせる。さまざまな職業の人との出会いを通して、多様な考え方や生き方を尊重するとともに、自分のよさや適性を見つめ直し、自分が周囲や社会のためにできることを考える力を育む。

イ 活動の様子

事前指導では、講師の方をお招きし、マナー講座を行った。講座を通して挨拶の重要性について学び、よりよい挨拶を意識して実践しようとする姿が見られた。ある事業所の体験では、実際に働いている方々と同じ服装を着用し、実際の業務を体験した【資料4】。また、職場体験の事後レポートからは、働くことの責任を実感する記述がよく見られた【資料5】。さらに、他の事業所では、お客様に渡す保冷剤を丁寧に整頓して保管する作業や、駐車場の草取りをすることを通して働くことの大変さや楽しさを感じることができた。体験後は、意欲的にお礼状を書く姿が見られ、お世話になった方々への感謝の言葉が書かれていた。

ウ 考察

それぞれの事業所で働く人たちと関わり、実際の業務を体験することで、仕事の意義や責任について自分なりに考え、進んで働こうとする意欲や態度を育むことができた。また、時間を守ることや相手を意識した明るい挨拶など、学校生活と社会生活に共通する大切な姿勢を気付かせることができた。体験後のお礼状には、お世話になった方への感謝が記されており、自分の活動が多くの人に支えられていることを振り返る姿が見られた。これらは、社会における多様な役割を尊重し、自分の在り方を見つめ直すことにつながったと考えられる。今後は、体験で得た気付きを生徒同士で共有し、自分のよさや適性、社会への関わり方をさらに考えることで、一人一人の具体的な進路計画や人生設計につなげたい。なお、仮説(2)をより確かに検証するためには、体験前後の記述を共通項目で比較し、考えの変容を継続的に捉える必要がある。

② 福祉実践教室 (1 年生)

ア ねらい

福祉について学び、子どもから高齢者まで、また障害の有無にかかわらず、全ての人が互いの立場や思いを尊重し、気にかけて、支え合うことの大切さを理解する。当事者の話や体験活動を通して、自分の生活の中でできる配慮や支援を具体的に考え、誰もが安心して暮らせる地域づくりに主体的に関わろうとする力を育む。

イ 活動の様子

事前学習では、福祉実践教室テキスト「思いだしてごらん」の資料を使い、福祉についての学習を行った。生徒は、実際に視覚障害のある方の体験を聞くことで、配慮してほしいことに気付き、自分たちの生活で配慮できることがあることを理解することができた。また、車いすやガイドヘルプの体験活動を通して、どのようなことに配慮してサポートするとよいのかを考えながら活動できた【資料6】。

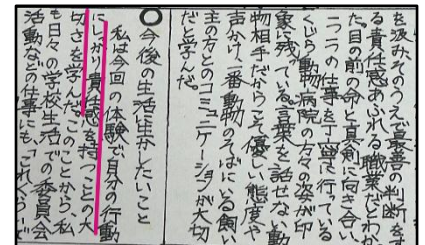
事後学習では各講座で体験したことや学んだことをレポートにすることができた。

ウ 考察

生徒は、当事者の話を聞き、実際に体験することで、障がいのある人が感じる不便さや必要な配慮への理解が深まった。振り返りには、「今後、困っている人がいたら声を掛け、みんなが安心して過ごせるようにしたい」という記述が見られた。これは、多様な立場を尊重し学びを自分の生活に結び付けて具体的な行動を考えた姿である【資料7】。



【資料4 消防服を着用している様子】



【資料5 事後レポートの一部】



【資料6 車いす体験の様子】

見えない方が歩くだけでもいつも大変だということがよくわかりました。これからは、目が見えなかったり、困ったりしている方を見つけたら、積極的に助けたいです。

【資料7 振り返りのスプレッドシート】

(3) 委員会のYDKプロジェクトの取組【仮説(3)】 **生徒指導の実践上の視点 (3) (4)**

① ねらい

各委員会において、生徒が人権や異文化理解など、自他を大切にするための課題を見だし、話し合いを通して一週間のプロジェクトを企画・実践・発信・振り返ることで、人権問題を自分事として捉え、自分たちの思いや考えをもとに、よりよい学校づくりに向けた行動を自己決定できるようにする。

② 活動の様子

生徒会執行部が生徒議会でYDKプロジェクトの取組趣旨を説明し「全校で幸せの輪をどんどん広げていこう」という思いを伝えた。委員会活動の時間を使って、各委員長・副委員長が話し合いの中心となりYDKプロジェクトの内容について案を出し合った。自分たちに何ができるかをよく考え「お互いのよいところを知ることができるような取組をしたい」「朝の登校時間に挨拶をしよう」など、具体的な内容や行う時間帯について主体的に計画を立案することができた。

以下は、各委員会で取り組んだYDKプロジェクトの内容である【資料8】。

委員会名	R 8年度プロジェクトの内容	給食	宗教の食文化
執行部	一日を振り返ろう週間	広報放送	YDK ポスターの制作
保健体育	なんかいい感じ コミュニケーション	生活	あいさつ運動
図書	人権にまつわる本の紹介	環境園芸	環境週間

【資料8 各委員会のプロジェクトの内容】

ア 給食委員会「宗教の食文化」

(ア) ねらい

近年、地域差はあるものの小中学校に外国にルーツをもつ生徒の増している。「食」の視点から世界に目を向け「宗教の食文化」というテーマで、世界のさまざまな宗教とその食事情への理解を深める。

(イ) 活動の様子

YDKプロジェクトとして世界の主な宗教を取り上げ、それらの食文化について調べまとめる活動を行った。また、調べたことをポスターにして各学級で「宗教の食文化」というテーマで発表をした。グループごとに調べる宗教を決め、インターネットを使って調べたりロイロノートの共有ノートを使って調べたことをまとめたりした。

各宗教の戒律などで口にすることを禁止されている食べ物、しきたりやマナーについて、写真や絵を挿入したり、色使いを工夫したりして、わかりやすく見やすいポスターに仕上げる事ができた【資料9】。プロジェクト実施後には、全校生徒を対象に宗教とその食事情への理解の深まりを調べるためにロイロノートでアンケートを実施した【資料10】。

(ウ) 考察

「宗教の食文化」の取組を通して給食委員の一人一人が世界の宗教とその食文化について知り、理解を深めることができた。異学年交流を目的としたグループ活動では、3年生を中心に協働する姿が見られた。学級での発表時には、モニターにポスターを映し、内容を視覚化することで、興味・関心をもって耳を傾ける生徒の姿が見られた。取組後の全校アンケートからは、「自分とは違う環境にある人たちの食生活を知ることと普段と異なる視点で食べ物のことを意識できた」「今回得た知識が、旅行など今後の生活で役に立つと思う」などの回答があった。

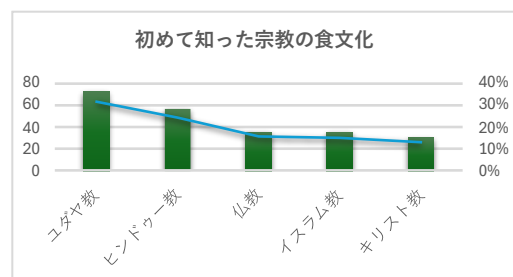
これらの記述から、異なる文化的背景をもつ人々へ関心が高まり、自分の生活を別の視点から見直すきっかけになったことがうかがえた。

イ 図書委員会「人権にまつわる本の紹介」

(ア) ねらい



【資料9 作成したポスター】



【資料10 宗教と食事情への理解の深まり】

人権に関する本を読み、登場人物や扱われている課題を自分の生活と結び付けて考えるとともに、そこから考えたことやよりよい行動を紹介ポップにまとめ、多くの生徒に発信することで、人権問題への理解と主体的に関わろうとする態度を育てる。

(イ) 活動の様子

図書委員が人権に関する本を読み、その内容を多くの生徒に伝えるための紹介ポップを作成した。ポップ作成に当たっては、本の内容や伝えたいことについて話し合いながらより伝わりやすくなる表現を考えた【資料11】。完成した紹介ポップを各学級で紹介し、人権について考えるきっかけづくりとした。



【資料11 作成の様子】

(ウ) 考察

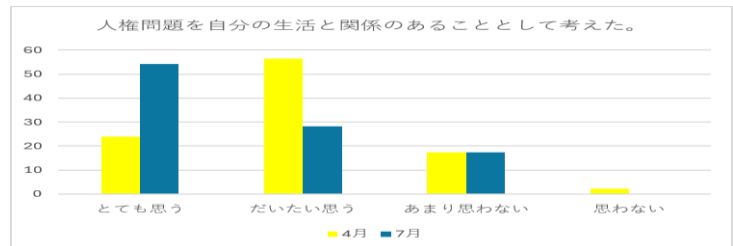
人権に関する本を読み、紹介ポップの内容を話し合う過程で、異なる見方に触れながら人権課題への理解を深めることができた。また、自分たちが考えたことを各学級で紹介する活動は、人権問題を自分事として捉え、他者に働きかける経験となった。今後は、紹介を受けた生徒の意識や行動の変容も検証する必要がある。

(4) YDKプロジェクト全体の考察

YDKプロジェクトでは、生徒が委員会活動を通して課題を見だし、企画・実践・発信・振り返りまで主体的に取り組んだ。給食委員会では、異学年で協働して宗教と食文化を調べ、ポスターにまとめて全校へ発信した。図書委員会では、人権に関する本から考えたことを話し合い、紹介ポップを作成した。これらの姿は、他者と協働しながら自分たちの考えを形にし、学校全体へ働きかけようとする主体性の表れである。また、自分たちの企画が全校生徒に届き、反応を得る経験は、「自分たちの行動が学校をよりよくした」という自己有用感を支えるものと考えられる。一方、実施後の調査は一部の取組に限られ、実際の行動変容を継続的に捉えてはいないため、仮説(3)の検証には、事前・事後の共通指標と継続的な見取りが必要である。

7 成果と課題(成果：○ 課題：●)

- 仮説(1)では、英語科の対話を伴う反復練習により、英語が苦手な生徒も発話を重ねる姿が見られた。音楽科では、ロイロノートで他者の振り返りを共有し、その後の表現に生かす姿が見られた。保健体育科でも、意見交流が自分の目標を設定する支えとなった。



【資料12 人権問題の自分事化を図るアンケート】

- これらは、ICT環境や対話の活用が主体的な参加と自らの学びの調整を促したと考えられる。
- 一方、単元前後の共通テスト等を実施していないため、基礎学力の向上については十分に検証できていない。
- 仮説(2)では、職場体験学習を通して仕事の責任や多様な役割に気付き、福祉実践教室では、当事者の話と体験を通して、実生活でできる相手の立場を踏まえた具体的な行動を考える姿が見られた。振り返りの記述から、多様な他者との出会いが自己の在り方を見つめ直し、互いの違いを尊重することにつながったと考えられる。
- ただし、体験前後の変容を共通項目で比較するには至らなかった。
- 仮説(3)では、YDKプロジェクトにおいて、生徒が人権や異文化理解に関する課題を見だし、協働して調べ、話し合い、制作物を通して全校へ発信する姿が見られた。事後アンケートには、異文化への関心や自分の生活を見直す記述があり、人権課題を自分事として捉えるきっかけになったことがうかがえた【資料12】。以上から、三つの実践は、めざす生徒像に迫る可能性を示したが、意識や行動の変容を継続的に捉える検証が必要である。
- 今後は、三つの仮説ごとに評価指標を明確にし、授業では単元前後の学習成果と振り返りを、体験活動では体験前後の意識や記述を、YDKプロジェクトでは企画・発信・振り返りとその後の行動の変容を、共通項目で継続的に記録・分析する必要がある。また、各教科、学校行事、委員会活動を教育課程上で関連付け、生徒が一つの活動で得た学びを別の場面で生かす過程を意図的に設けたい。11月に予定する「ストリートチルドレンに学ぶ生き方」をテーマとした人権講演会でも、事前学習・講演・対話・振り返り・行動化を一連の学びとして構成し、研究を継続・発展させたい。